愉快に過激に品性を持って

樋野興夫著
いい覚悟で生きるより

がん細胞は内なる敵と考えて、共存する道を考えましょう。
人の規範になるような人間を目指すことも、その力になります。

がんには、「がんと闘う」「がん闘病記」といった言葉がついてまわります。 かつて、不治の病と言えば結核でした。ペスト、コレラなども怖い病気ですが、これらはみんな感染症です。 感染症とは外から襲ってくる敵で、医学の歴史から見ると、やがては克服される病気です。

それに対して、がん細胞はいわば内なる敵ですから、共存することが求められます。わが家に不良息子ができたからといって、親はわが子を排除することはできません。覚悟を決めて向き合わねばならないのと同じことです。不良息子は本来の自分を見失っていますから、あるべき姿に戻るよう直す努力は必要です。がんも共存したうえで、本来の細胞としての役割に戻るよう、日々進歩する医薬品や医療技術をもって闘うのです。

それはさておき、家族や親しい人ががんだとわかると、「頑張って闘ってく ださい」「あきらめたら負けですよ」などという言葉をかけていませんか。

相手を気遣い、励まし、力づけたいと思って心からかける言葉なのでしょうが、誰よりも頑張らなければと思い、頑張っているのは患者さんなのです。そのわきから、「頑張れ」「負けるな」「闘い抜いて」という声を聞かされ続けている相手の本当の苦しみを理解しているでしょうか。

とくに、がん患者の約 3 割はうつ状態にあると言われます。その人たちが、「頑張れ」「負けるな」と言われることは、逆効果ではありませんか。「頑張れない自分はだめな人間だ」「負けなのだ」と、落ち込んでしまうでしょう。

病気になったことは、決して負けではありません。患者さん自身はもちろんのこと、家族や周囲の人も、それを忘れてほしくないのです。とくに、がんのような長期にわたって闘うための治療と経過観察が必要な病気とは、これからの時間を大切に向き合うように過ごしてほしいと思います。

そんなとき、私は言います。
「愉快に過激に品性を持って」
「頑張って」という声には耳を塞ぐ人が、この言葉の意味することはなんだろうと考え始めます。

世の中には愉快な人はたくさんいます。過激な人もいます。私が言う「過激な人」とは、実行力、行動力が伴う人という意味です。また、何事にも真摯に向き合う品性を備えている人もいます。けれども、この 3 つを合わせ持つ人は、めったにいません。だからこそ、人の規範になるような、そういう人を目指そう、と私は言うのです。

内なる敵との長い共存の道を歩むとき、人生の目標は必ずあなたの力になるはずです。